

資 料

アウトドアスポーツを通じた持続可能な地域づくり

——広島県におけるスポーツツーリズム——

岡 安 功*

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、世界を大きく変えることになっている。観光についても、新しい様式の創出や検討が求められる。これまでは、外国人観光客の受け入れを積極的に促進するインバウンド政策が進められてきた。しかしながら、星野リゾートを手掛ける星野佳路氏が述べるように、国難ともいえる状況の中では国内需要の喚起が必要であり（日本経済新聞、2020）、観光の在り方を再考する時期として捉えることができる。実際、2020年の訪日外国者は前年比で約-90%（日本政府観光局、n.d.）を記録した。

そもそも観光は、古典「易経」を踏まえて「国の光を観る」という事、また一国の王たる者が国内を見て回りながら国の方向性を「しめす」という2つがある。一方でツーリズムは、陶芸のろくろを意味する「トルヌス」というラテン語の派生語であり、「巡る」や「周遊する」という意味が込められている（高田・石森、1993）。そして彼ら（1993）は、交通機関の発達によって遊動現象の多様性が生まれ、名所等を訪れる「観光」よりもレクリエーションなどの多様な目的で遊動する「ツーリズム」の概念が現代では適していると示した。

スポーツツーリズムにおいて期待されるキーワードの一つとして、地域活性化やまちづくりがある。このまちづくりの本質は、その地域に

住む人たちが主体になり、外部と協同するものであり、地域内外を踏まえた活性化策が必要である（藤口、2013）。また近年は、まちづくりに加えて、世界的に持続可能な発展も取り込まれている。Scottら（2022）によれば、地球温暖化により雪不足が生じ、過去に冬季五輪を開催した21の開催都市で今世紀末に開催できるのは1都市（札幌市）になるという深刻な自然環境の予測を報告した。こうした状況を招かないために2015年の持続可能な開発のための2030アジェンダ宣言では、スポーツが社会の進歩に果たす役割が示された（国際連合広報センター、2015）。またスポーツに特化したものでは、2016年に国際連合がスポーツと持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）をスタートさせた。例えば、気候変動とその影響への対策としては（スポーツと持続可能な開発目標：13）、スポーツイベントなどを通じて気候課題への積極的な対応が求められている（国際連合広報センター、2016）。具体的には、地球温暖化の原因とされる温室効果ガスの排出削減がある。

広島県にはユネスコが認証した二つの世界遺産があるが、通過型観光（宿泊が伴わない観光）が主となり周遊型観光が根付いていない。その要因の一つは、世界遺産の二ヶ所以外の観光コンテンツの開発やプロモーションが不十分であることだ（日本銀行広島支店、2019）。一方で2020年4月に広島県は、スポーツによる地域活性化を目的にし「スポーツアクティベーションひろしま」という新たな組織を立ち上げた。こ

* 広島経済大学経営学部スポーツ経営学科

の組織の公式サイト（広島県，2020）には，スポーツ資源を活用した地域活性化として，例えば瀬戸内海に面し山間部もある呉市はアウトドアスポーツで地域のにぎわいを生み出す戦略などを打ち出すなど，広島県内で各地の資源を活用した取り組みが進められている。

2. 生涯スポーツとしてのアウトドアスポーツ

日本は，自然資源に恵まれた国であり，固有種が多いのが特徴である。北緯20度から45度の中緯度に位置し，南北 3,000 Km にわたる島嶼が細長く連なる島国であり，様々な気候帯の中で幅広い生態系が見られる。そして，知られているだけでは9万種以上，知られていないものを含むと30万種をこえる生きものがおり，固有種の比率は先進国の中で極めて高い（環境庁，2012）。また歴史的に12の文明が存在し（そのうち7つはもはや存在しない），その中には，日本文明が一つの固有のものを持った国である（ハンチントン，1998）。つまり，日本は独自の固有の自然資源と文明¹⁾を持った国である。

生活や健康に直結する「生涯スポーツ」は，長年にわたって注目されてきた。特に2020年の前半は，緊急事態宣言前後からの「自粛生活」や「在宅勤務」で「新生活様式²⁾」への変容が呼びかけられ，地元での健康づくり・体力づくりが進められている（野川，2020）。近所でのウォーキングや体操だけでなく，地域の資源資源を活用したアウトドアスポーツは，適切な生涯スポーツにもつながるものである。

こうした中で，日本において主に親しまれてきたアウトドアスポーツは，山，海，空の3領域に分類することができ，様々な領域で自然環境を楽しむことができる。日本は観光資源としての自然資源が豊富でもあり，アウトドアスポーツツーリズムを楽しむ土台がある（原田，2020）。特に我が国のアウトドアスポーツは，

世界と比較して多種多様であり，また国土が大きくないため，比較的短い距離の移動で楽しむことが可能である。以下は，柳（2004）の説明を基にまとめた3つのタイプのアウトドアスポーツである。

まず，山岳におけるアウトドアスポーツは，登山やハイキングだけでなく，マウンテンバイク（MTB）やスキー・スノーボードなどがある。海洋におけるアウトドアスポーツは，サーフィンやヨット，さらに近年はスタンドアップパドル（SUP）などがある。空域では，気球やグライダー，そしてパラグライダーなど様々な種目がある。特にこの中でも，わが国では，長く登山が一般的に親しまれてきた。登山の歴史は，7世紀ごろの信仰登山にさかのぼり，江戸時代には富士講などの大衆登山になった。国土の70%が山であり，北海道から九州まで様々なレベルの色々な登山を楽しむことができる。

四方が海に囲まれたわが国では，多様な海洋での活動がある。各種目の参加人口は，サーフィン，ウインドサーフィンが60万人，ヨット，モーターボートが40万人，そしてハンググライダー，パラグライダーなどが20万人である（財団法人日本生産性本部，2019）。つまり，一定の愛好者が継続して楽しむアウトドアスポーツとして認知されている。海洋での活動は，海浜，海上，海面だけでなく，海中や海底と幅広い活動領域がある。また風を利用するセーリング種目，漕ぐことを中心としたローイング種目，さらに海中を観察するなどのダイビング種目など，多様な海洋での活動がある。

最後に，空域での活動である。広い空における活動は，パラシュート，気球，ハンググライダー，さらにスカイサーフィンなどがある。特に，ハンググライダーやパラグライダーは人気がある。佐賀市では，「佐賀インターナショナルバルーンフェスタ」という気球イベントを，国際親善と地域振興への寄与を目的に開催して

いる。2019年度のイベントでは、17カ国・地域から123名が出場した（佐賀インターナショナルバルーンフェスタ，2019）。こうした空域の活動は、山や海と異なり、様々な法的制約を受けるものである。一方で山や海同様に、安全を重視することは、自然の中で行われるアウトドアスポーツの最重要事項の一つである。

3. 研究目的

本資料は、スポーツツーリズムを通じた持続可能な地域づくりの方向性を検討した。特に本資料では、広島県のアウトドアスポーツ要素を抽出し、生涯スポーツや持続可能な地域づくりに有効なスポーツツーリズムの観点から、現状や課題を整理し、解決に向けた提言を行うこととする。キャンプ人気が増えつつある中、アフター・コロナにおけるスポーツツーリズム推進に向けたアウトドアスポーツ要素の抽出は、重要な情報となる。本資料の調査は、上杉（2019）、岡安ら（2013）の研究手法を参考にビジターセンターなどで関連資料等の収集を行い、先進事例地域の現状を把握するために現地を訪れた。

4. 広島県でのアウトドアスポーツ

スポーツツーリズムの中でも、リゾートやアドベンチャーを総合し、アウトドアスポーツとしてまとめることができる。公益財団法人広島観光コンベンションビューロー（n.d.）によれば、様々なアウトドアスポーツが紹介されている。広島県は、自然豊かで様々な活動を楽しむことができる。例えば、瀬戸内海でのシーカヤックがある。また近年は、同じ海での活動としてSUPもある。また、しまなみ海道サイクリングロード（西瀬戸自動車道に併設された自転車道）が特に有名であるが、江田島やとびしま海道などにおけるサイクリングも楽しむことができる。また広島県には、登山やトレッキング

コースも豊富にある。深入山は、西中国山地国定公園に位置し、三段峡の東にそびえる標高1,153 mの低山である。さらに広島市安佐南区には、武田山があり、約80分で登ることができる（広島市，n.d.）。川は、リバーカヤックやシャワークライミングもある。さらに北部には、スキーやスノーボードなどの冬のアクティビティが楽しめるゲレンデがある（写真1，2）。

具体的なスポーツを通じた持続可能な地域づくりの取り組みは、広島県の各地で進められている。例えば広島県佐伯区湯来町では、特定非営利法人湯来観光地域づくり公社（n.d.）が中心になり地域活性化として地元を流れる河川を



（スポーツ経営学科の実習：広島経済大学経営学部提供）

写真1 広島県北部山岳地域でのスノーボード



（スポーツ経営学科の実習：広島経済大学経営学部提供）

写真2 瀬戸内海・宮島付近でのシーカヤック

利用したシャワークライミングを2020年度に本格的に開始した。この地域は、広島市内から自動車で約1時間というアクセスがよく、古くは広島藩主の湯治場であった湯の山温泉があるなど、観光での地域活性化の要素は兼ね備えている。そこにアドベンチャーリズムとしてのシャワークライミングや中国地方を一望できる大峰山のトレッキングなどを展開することで、新たな来訪者の増加が期待されている。また、リバーサウナというテント型のサウナを屋外に設置する新たな取り組みも進められている。冬季の開催では、テントサウナから出ると、すぐに冷気を肌を感じる。また、もし冷水が必要であれば、近くの川を利用することも可能である(写真3)。この他にも、古民家の経営や温泉街の再生という滞在型の観光を提案している。そしてさらに、アウトドア・アクティビティで自然の素晴らしさを多く人に参加してもらうだけでなく、その参加者に地域の魅力を発信できるようなシステム作りが進んでいる。

あきおおたから (n.d.) によれば、深入山は森林浴の効果を最大限に生かす「森林セラピー」に着目し推進している。森林浴や野外散策について、科学的データを基にその効用なども説明している。また「えきでんのまち せら」には、



(自然資源を活用した地域づくりの事例：NPO 法人湯来観光地域づくり公社提供)

写真3 リバーサウナ

全国的に強豪校とされる世羅高等学校も利用するクロスカントリーのコースがある。起伏のあるコースで、自然豊かな環境でトレーニングすることが出来る最適な場所である(世羅町観光協会, n.d.)。このように、広島県にはアウトドアスポーツが楽しめる自然環境があるだけでなく、そうした資源を活用した持続可能な地域づくりも進められている。

5. 持続可能な地域と環境づくり

カールソン (1987) は「沈黙の春」において「私たちの住んでいる地球は自分たち人間だけのものではない—以下省略 (p. 243)」という一節がある。まさに、私たちがアウトドアスポーツを楽しむ自然環境は、私たちが楽しむ環境だけというものではない。持続可能な形を考える上では、地球全体で自然資源の環境維持と有効活用のバランスを検討する事が必要である。

広島県も属する瀬戸内海国立公園など国立公園の利用という視点では、様々な取り組みが今後も求められる。その一つが受益者(利用者)負担である。最近、環境省 (n.d.) が「国立公園満喫プロジェクト」と表して、「日本の国立公園を世界の旅行者が長期滞在したいと憧れる旅行目的地」という趣旨で進めてきた。これは決して海外のいわゆるイバウンドだけでなく、国内の旅行者にも有効なプロジェクトである。まだまだ日本人でも訪問したことがない、詳しく知らない国立公園は多いのではないだろうか。景勝地を訪れる観光スタイルから、自然豊かな地域を訪れキャンプやハイキングなどをするレジャー・スタイルをさらに広めていくこともできるのではないだろうか。ただその時に、自然環境の保護等の検討も必要であり、何らかの利用者の負担を踏まえて、後世にも日本の豊かで独特の自然環境を残すことが重要である。

海外の先進的な事例としては、カナダを取り上げることができる。パークスカナダ (Parks

Canada) は世界で初の国立公園管理組織として、カナダの国立公園を一括に管理・運営している(上杉, 2019)。またカナダは、国立公園のシステムに関して“User-Pay Principle”, つまり「利用者負担の原則」が推進された(加藤, 1996)。下記の写真4は、ジャスパー国立公園の料金所とその料金表である(写真4)。このシステムは、日本での利用者費用が導入される場合に有効な方法として設置することができる。実際に広島県廿日市市は、訪問者を対象に「宮島訪問税」を設置することが決まった(総務省, 2021)。

今後、わが国でも、こうした利用者負担の考え方は進んでいくことが考えられる。そしてそれは、持続可能なアウトドアスポーツを楽しむことができる環境整備にもつながるものである。またそれに加えて、他の種目も実施できることもあるだろう。例えば、スイス・ツェルマットでは、自家用車の乗り入れを禁止し、商用車でも独自の電気自動車を導入し、その他では馬車を使用し環境への配慮した取り組みが行われている(写真5)。こうした事も、宮島や瀬戸内海の島々を中心に検討する事ができる。国立公園という視点だけでなく、別の持続可能な観光と地域住民の生活の視点から包括的なまちづくり・観光地づくりを検討することもできる。



(カナダ・ジャスパー, 2012年9月:筆者撮影)

写真4 国立公園の料金所



(スイス・ツェルマット, 2016年3月:筆者撮影)

写真5 ツェルマットの電気自動車

6. ま と め

広島県のアウトドアスポーツは、登山やシーカヤック、さらにサイクリングなどがあり、これらを活用しスポーツツーリズムを推進することで持続可能な地域づくりが可能となる。また地域活性化の視点では、広島県佐伯区湯来町でアウトドアスポーツのシャワークライミングと共にリバーサウナなどを組み合わせた地域資源を活用した取り組みも推進されている。一方で安芸高田市では、森林セラピーや野外散策に着目した森林浴などが推進されている。地域活性化の視点では、アウトドアスポーツは重要な資源として全国で活用されている。例えば、冬季五輪も開催された長野県白馬村は、四季を通じてアウトドアスポーツが楽しめる場所として、国内外から注目が寄せられている(岡安・永吉, 2002)。近年はその白馬地域に、グリーンシーズンも訪問者のための山岳テラスを設置したり、アウトドアメーカーがグランピングをコンセプトに高級感のある施設をオープンしたり、様々なニーズに対応した持続可能なアウトドアスポーツの環境づくりを進め、地域活性化に貢献している。広島県でも、四季を通じたアウトドアスポーツが可能であり、自然資源や地域の強みを生かしたアウトドアスポーツによる持続可

能な地域づくりは、広島県でも期待が寄せられている。今後この取り組みは、さらに持続可能なまちづくりに関連して促進すると考える。それは、観光のマイクロツーリズムへのシフトと共に、地元の身近な資源の再発見にもつながる。

しかしながら、地域とプログラムに精通したガイド養成や観光振興と住民の一般生活のバランスという課題もある。広島県におけるアウトドアスポーツを考えた時、上記のようなことを踏まえた環境整備が必要である。また海外での入山料や環境に負荷の少ない乗用車の導入政策などは、様々な社会的背景の中で長い歴史の中で作り出されてきた。大田(2000)は、特にヨーロッパ系アメリカ人におけるアウトドアレクリエーションの行動様式が歴史的に形作られてきた背景を指摘するように、日本人独自の自然観や行動様式を踏まえた持続可能な地域づくりとアウトドアスポーツの在り方を考えることが重要である。

最初に述べた通り、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の防止のため、プロスポーツは通常通りに開催されていないだけでなく、地域の観光などにも大きな打撃を与えている。こうした中で、フランスの思想家・経済学者のアタリは、今後の世界における利他性かつ他者との共感を挙げた(アタリ, 2020)。持続可能なアウトドアスポーツは、自然環境への配慮も必要であり、いつまでも誰もが楽しむことができるアウトドアスポーツの環境(山, 川, 海, 湖等)を、個々人がどのように考え、行動していくか、そして自然や他者との共感こそが重要である。

付記: 本資料は、広島経済大学経営学部スポーツ経営学科が発行した10周年記念論文集に加筆・修正したものである。

注

1) 広範囲の文化的なまとまり(ハンチントン, 1998)と定義されている。

2) 新型コロナウイルス感染症の拡大防止のための生活様式は、厚生労働省: <https://www.mhlw.go.jp/content/000641913.pdf> (参照: 2022-5-24) によって説明されている。

引用文献

- Scott, D., Knowles, N.L.B., Ruddy, M., and Steiger, R. (2022): "Climate change and the future of the Olympic Winter Games: athlete and coach perspectives," *Current Issues in Tourism*, doi: 10.1080/13683500.2021.2023480
- あきおたから (n.d.) 『深入山』 <https://cs-akiota.or.jp/enjoy/tourism/shinnyuzan/>, (参照日2022年5月24日)
- アタリ・ジャック (2020) 「2020年代の針路: 次世代の利益, 社会の基軸に」『日本経済新聞』1月6日朝刊
- 上杉 杏 (2019) 「カナダの国立公園における持続的アウトドアスポーツツーリズム」『生涯スポーツ学研究』16(2), pp. 23-30
- 大田伊久雄 (2000) 『アメリカ国有林管理の史的展開: 人と森の共生は可能か?』京都大学学術出版会
- 岡安 功・永吉宏英 (2004) 「アウトドアレクリエーションによる地域活性化」『大阪体育大学研究紀要』35, pp. 127-138
- 岡安 功・伊藤央二・山口志郎 (2013) 「カナダ・アルバータ州の生涯スポーツ・レジャーと地域の関連性について」『生涯スポーツ学研究』9(1/2), pp. 49-55
- カールソン・レイチェル: 青樹築一訳 (1987) 『沈黙の春』新潮社
- 加藤峰雄 (1996) 「国民全体の負担から利用者の負担へ」『国立公園』NOV, pp. 12-17
- 環境省 (n.d.) 『国立公園満喫プロジェクト』<http://www.env.go.jp/nature/mankitsu-project/index.html>, (参照日2022年5月24日)
- 環境庁 (2012) 『豊かな自然共生社会実現に向けて: 生物多様性国家戦略2012-2020』http://www.biodic.go.jp/biodiversity/about/library/files/nbsap2012-2020/nbsap2012-2020_cop11ver.pdf, (参照日2022年5月24日)
- 公益財団法人広島観光コンベンションビューロー (n.d.) 『ひろたび』<https://www.hiroshima-navi.or.jp/>, (参照日2021年9月1日)
- 国際連合広報センター (2015) 『持続可能な開発のための2030アジェンダ宣言』https://www.un.org/en/ga/search/view_doc.asp?symbol=A/RES/70/1, (参照: 2022年5月26日)
- 国際連合広報センター (2016) 『スポーツと持続可能な開発 (SDGs)』https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/18389/, (参照: 2022年5月26日)
- 財団法人日本生産性本部 (2019) 『レジャー白書2019』

- 佐賀インターナショナルバルーンフェスタ2019 (2019)『2019佐賀インターナショナルバルーンフェスタ』<https://sibf.jp/news/2019/20190918a.html>, (参照日2022年5月24日)
- 世羅町観光協会 (n.d.)『世羅町ランニングコースマップ』<https://seranan.jp/wp-content/uploads/2015/03/running-course-map.pdf>, (参照日2022年5月24日)
- 総務省 (2021)『報道資料：広島県廿日市市「宮島訪問税」の新設』https://www.soumu.go.jp/main_content/000761092.pdf, (参照日2022年1月6日)
- 高田公理・石森秀三編 ヒューマンルネッサンス研究所企画 (1993)『新しい旅のはじまり』PHP 研究所
- 特定非営利活動法人 湯来観光地域づくり公社 (n.d.)『公式サイト』<https://e-yuki.net/>, (参照日2022年5月24日)
- 日本銀行広島支店 (2019)「広島県内により多くのインバウンド需要を取り込むためには～地域一丸となった周遊型観光の確立～」『BOJ Reports & research papers』<https://www3.boj.or.jp/hiroshima/files/data/special/inbound2019.pdf>, (参照日2022年1月6日)
- 日本経済新聞 (2020)『星野リゾート代表、観光業どう見る、「1年半が勝負、国内開拓を」、危機乗り越えた経験、自信に』6月2日朝刊
- 日本政府観光局 (n.d.)『年別 訪日外客数、出国日本人数の推移』https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/marketingdata_outbound.pdf, (参照日2022年1月6日)
- 野川春夫 (2020)「コロナ禍におけるスポーツと持続可能な地域づくり」『みんなのスポーツ』7, pp. 11-13
- 原田宗彦 (2020)『スポーツ地域マネジメント』学芸出版社
- ハンチントン・サミュエル：鈴木主税訳 (1998)『文明の衝突』集英社
- 広島県 (2020)『スポーツアクティベーションひろしま』<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/soshiki/257/sah.html>, (参照日2022年5月24日)
- 広島市 (n.d.)『武田山』<https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/asaminamiku/668.html>, (参照日2022年5月24日)
- 藤口光紀 (2013)「クラブをつくる：Jクラブをつくるところから考える地域づくり」木田悟ほか編、スポーツで地域を拓く』『東京大学出版会』pp. 169-180
- 柳 敏晴 (2004)「生涯スポーツとアウトドアレジャー」川西正志・野川春夫編『生涯スポーツ実践論 第2版』市村出版, pp. 185-195